

2018年  
か ぜ ひ か

# 風光れ

人権のたより 第3号 6月11日発行

三重県立津東高等学校

体育祭も無事に終わり、いよいよ梅雨入りです。「栗花落」栗の花が落ちると「梅雨入り」ということで、「ついで」と読みます。じめじめとして、気分も晴れないかもしれませんが、そんな中に紫陽花が際立って美しく咲いています。

井上靖が「あじさい」というエッセイを書いています。

あじさいの花を美しいと思うようになったのは、大人になってからである。  
梅雨期の重く湿った大気の中に、静かに咲いている薄紫の花は、なかなかいいと思う。雨をしっとりと吸って重たげでもあり、多少憂鬱げでもあり、こうした時期に咲かねばならぬ花としての諦めも持っている。

ぜひ、紫陽花に目と心をとめてみて下さい。

## 今月は『風の旅人』を紹介します。

ベッド式車椅子を通りがかりの人に押ししてもらいながら旅を続けた、実在の重度身体障害者（故・宇都宮辰範氏）の生き方をドラマ化した作品です。人間にとって「自立」とは・・・、私たちが生きやすい社会とは・・・、自由な生き方とは・・・、等を問いかけています。

そのなかで、心に残る言葉があります。

「一回でも出会った人はオレの友達やと考えるねん。友達を増やすってことは出会っていくことなんや。だから目的地までお送りしましょうという人をオレは断るんや。その方が多くの人に会えるやろ。」

「ほんとうの自立とは、他者の力をどれだけ借りられるか、にかかっている。」

人間社会の共通ルールは「人に迷惑をかけるな」であるけれど「自分に力をつけ人の力を借りないで、自立したいと一所懸命に骨身を削っている。人を信じられず信じられるのは、結局自分だけやないかって頑張っていたら、それは自立なんかやなくて孤立や。」

孤立しないで、多くの人と出会い「なかま」を増やしましょう。

◎人権室に『風の旅人』の冊子があります。

読みたい人はぜひ借りに来て下さい。



